

未来への伝承

第193回

輸出用花火玉 — 輸出振興の時代 —

「土浦の花火」は、第1回の開催から今年で100年を迎えます。大正14（1925）年に、神龍寺（文京町）の秋元梅峯住職が団長を務める大日本仏教護国団が主催した全国煙火共進会が始まりでした。開催の趣旨には、大正10年に阿見村に開設した霞ヶ浦海軍航空隊（当初は臨時海軍航空術講習部）の殉職者の慰霊や、関東大震災後の不況下にあった土浦の商業振興などがありました。

その後、大会の主催は大日本仏教護国団から土浦煙火協会へと移り、戦争中の中断はあったものの、昭和21年に全国に先駆けて花火大会を復活し、現在に至ります。

今回は、今から60年ほど前の昭和30～40年代の花火事情を紹介します。

写真の青い玉は、輸出用の花火玉（模造品）です。土浦にあった花火会社「土浦火工」の打上花火で、国内用とは異なり、表面には防水スプレーが塗られ、英語のシールが貼られています。上部のシールには、「SPECIAL JAPANESE FIRE WORK | NIGHT SHELL（夜の花火）」とあります。夜用花火は青色に、昼用花火は赤色に表面が塗られました。下部のシールには注意書きが記され、土浦火工の花火師「箱守彰」の印鑑が押されています。

箱守彰さん（1930～2017）によれば、花火玉の輸出先は、ほとんどがアメリカとヨーロッパで、需要が多い時期には作業が間に合わず、夜の残業も多かったそうです。また、アメリカはインチ、ドイツはミリ、日本は寸と規格が違っていたため、現地の筒の口径に合わせ花火の上がり

が良くなるよう、玉の皮を余計に貼るなどして調整したそうです。

昭和30～40年代には国の政策として日本製品の輸出振興が叫ばれ、花火業界もその影響を受けていました。「土浦の花火」も、昭和37（1962）年の第31回大会から、同46年の第40回大会まで「輸出振興全国花火競技大会」と題して行われました。

土浦火工を創設し率いた北島義一さん（1908～79）による関係省庁への働きかけもあり、「土浦の花火」には、昭和36年から通商産業大臣（経済産業大臣）賞が創設され、のちに「速射連発」（スターマイン）の優勝者にこの賞が授与されることになりました。

土浦火工では、昭和20年代後半から40年頃まで輸出用の花火を作っていました。採算が合わず注文があっても作らなくなった、と箱守彰さんは語っています。土浦火工の歩みは、当時の日本の花火製造業の方向性も示しているようです。

今回紹介した輸出用花火玉（模造品）は、博物館の秋季展示（10月1日～12月27日）で、箱守彰さんの音声記録は、テーマ展「土浦花火百年」（10月11日～11月24日）で公開します。

関市立博物館（☎824・2928）

